

まちづくり支援の可能性～熊本県宇城市三角町を題材に～

熊本大学工学部 学生会員 ○鶴丸 悠一 熊本大学工学部 正会員 星野 裕司
熊本大学工学部 正会員 小林 一郎

1. はじめに

現在、日本では地域の実情に応じた、住民の主体的な参加による個性あるまちづくりが求められている。このようなまちづくりを実現するために、全国各地でも様々な実践的な取り組みが行なわれ、人材教育論、まちづくり支援システムなどの研究が数多くなされている。これら研究の多くは、住民の主体的な参加のための支援を目的としているが、実際のまちづくりでは、未だ多くの困難を伴っている。

そこで著者らは、支援のあり方に着目した。「まちづくり支援」を住民の自発的なまちづくり活動を補佐することだと捉え、既往研究の「まちづくり支援」の概念図を図-1のように位置づけた。即ち、まちを「内側」と「外側」とに分けて考えることで、これまでのまちづくりの取り組み・支援研究が、まちの「内側」においてのみ着目され、「外側」からの視点が抜け落ちていると考えられた。

このような背景から、本研究では、まちの「外側」に焦点を当てる。ある主体がまちを「外側」から支援する事が、まちの「内側」の存在である住民に対して、十分にまちづくり支援となり得るかを明らかにすることを目的とした(図-2)。

2. 本研究の対象とその現状

(1) 本研究の対象

熊本県宇城市三角町は熊本県の中央部、宇土半島の先端に位置する総面積 48.31km²、人口 9,697 人の小さな町である。南北を不知火海、有明海に挟まれ、西にかかる天草五橋(1号橋)は天草への架け橋となっている。町は天然の良港である三角東港、三角西港を中心とする商業、観光地域と、なだらかな丘陵を利用した果樹、ハウス園芸主体の農業地域からなる。本研究では、三角東港(以下、三角港)周辺地域を中心に行なわれているまちづくりに焦点を当てる。

(2) 三角町の現状

三角町は、国道・フェリー・JR が集中し、古くから

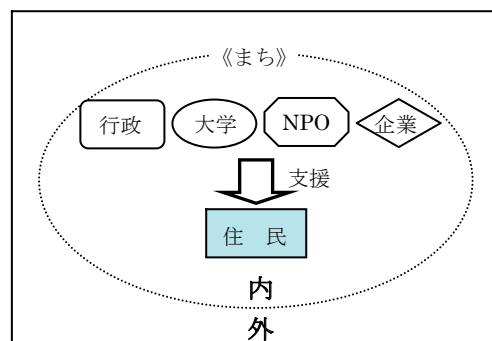


図-1 既往研究のまちづくり支援の概念

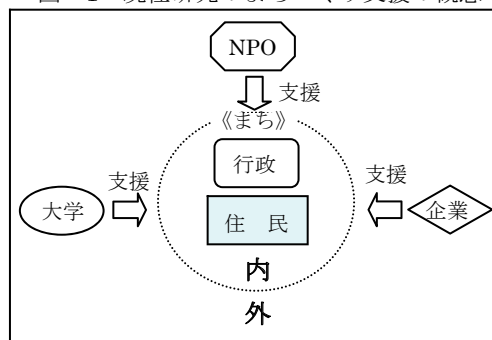


図-2 本研究のまちづくり支援の概念

天草への玄関口として栄えてきた。しかし、平成 18 年に三角一島原フェリーの運航が廃止され、三角港は次第に港としての機能を失いつつある。このような背景から、三角町では現在、様々なまちづくりが行なわれている。

3. 三角町のまちづくり

(1) まちづくりの変遷

三角町は、平成 17 年に不知火町、小川町、松橋町、豊野町と合併し宇城市となった。本研究では、まちづくりの変遷として、宇城市合併以降の三角町のまちづくりを取り上げることとした。

三角町では合併以降、図-3 に示すように様々な主体によるまちづくりが行なわれている。これらは主に、行政が民間企業に町の活性化を目的に業務委託したものや、大学による現場での実践的まちづくり教育、そして地元商工会による町おこしイベントなどである。これらを図-2 に示した、まちの「内側」と「外側」の概念により整理すると、まちの「外側」からの取り

